

大学院という選択～ステップアップの為に

う蝕学分野 大 墨 竜 也

この原稿のテーマの通り、私は大学院への進学をお勧めしたいと思います。これから進路を考えようとする皆さんの目に留まって少しでも参考になればうれしいです。

私は、臨床研修を機にう蝕学分野に入局し、そのまま大学院でもお世話になっていましたので、早いもので4年が経ちます。大学院生としてもまとめの時期となりました。振り返ってみると、実際は学部を卒業して研修医になるまで大学院という選択肢はありませんでした。総合診療部での臨床実習で、現在も研究・臨床と指導いただいている先生から一緒に研究もしてみないかと声をかけていただいたことがきっかけでした。

大学院は歯科医師としての私の人生を転換したといっても過言ではありません。印象に残るのは、大学院生となった年の夏にアメリカの研究所に訪問の機会をいただいたことでしょうか。英語がまるで話せない状態で、各国から集まった研究者とのランチタイムで勇気が出ずに一言も発することが出来ず、というトラウマになりそうな刺激的な体験から始まった大学院生活でした。今ではそれが大学院生活に必要な英語の良いモチベーションとなっています。といってもまだまだ英語の能力は拙いものですが。研究のテーマは口腔内バイオフィームで、いわゆる歯垢、プラークといったものを扱っています。このバイオフィームは水と細菌が付着できる足場さえあればどこにでも存在できるという性質上、医学系のみならず、農学系、工学系分野でも数多く研究されています。そのため国内外の歯科以外の分野の研究者の方とも交流することができ、人間性の幅、視野が広がったと実感しています。

進路に迷う学生は多いかと思います（自分自身



もそうだったように)。今思うと、時間の作れる学生の頃から研究に携わってみて、進路選択の時に研究も身近なものとして捉えられると、歯科医師として資格を取得し、腕を磨いて開業というばかりでなく、教育、研究へと幅広く携われる、将来設計が可能になるのではないかと思います。ただ、いざ国家試験に受かって、研修医として臨床を経験し、一度経済的に自立すると、再び学生に戻って両親に負担をかけてしまうという思いから選択肢に入らないという親孝行な方もいるかもしれません。しかし、奨学金、学生教育のお手伝いをするティーチングアシスタントをはじめとする様々な形で経済的バックアップを学部、所属講座から支援頂けるかと思います。なにより、大学院4年間はお金では買えない貴重な人生経験となるはずで。

とは言っても、大学院に入って研究をすると周囲の同期生に臨床で遅れを取ってしまうと危惧が頭につきまといます。でも視点を変えれば、研究で培った、情報の取捨選択、問題解決能力論理的

思考が臨床の場でも大いに役立ってくると思います。研究ではそれぞれ違う分野で日々頑張っているのですが、私のような臨床講座の大学院生は臨床の場ではお互いの専門分野のことを聞き合ったり、症例の悩みを相談したり、自分で望めば常に最先端の治療技術の情報を得ることが可能であるという環境は整っています。

日々の臨床と細菌に振り回される研究で忙しくも充実した日々を送っていますが、この経験は、この先自分が研究または臨床の道、いずれに進むとしても必ず糧となりステップアップの土台となってくれることは間違いないと思います。皆さんも是非大学院で将来の飛躍の為の自分磨きはいかがでしょうか。



大学院はいかがですか？

生体歯科補綴学分野 北見恩美

生体歯科補綴学分野4年の北見恩美です。大学院の正式な分野名は覚えにくいのですが、学生のみなさんが『クラブリ』と呼んでいる分野が、私が所属する『生体歯科補綴学分野』です。今回いただいたテーマは「大学院へ行こう」ということで、私が大学院に進学したきっかけをお話しさせていただきます。

私が補綴に興味を持ったのは6年生の臨床実習でした。私の担当させていただいた患者様は上顎前歯部のブリッジの仮歯が何度も取れてきてしまう方でした。冠ブリッジ診療室の先生にご指導いただきながら何ヶ月もかけて調整し、仮歯がとれない形態に調整をしました。最終補綴にあたり、先生から①仮歯の形をどのように最終補綴物に反映させるか ②適切なアンテリアガイダンスはどのようにして決定するのかというレポートを課されました。どんなに教科書を読んでもわからない。図書館に行ってもどの本を読んでいいのかわからない。暗い気持ちのままレポートを提出した時に先生に「最終補綴に反映するにはカスタムインサイズルテーブルを使う方法があるよ。」と教えていただきました。呪文?? そのうえ「適切なアンテリアガイダンスを決定する方法があったら僕が教えて欲しいくらいだ。」と言われ、補綴の奥深さと難しさを知りました。大学の講義で学んだ範囲だけでなく、もっともっと知らなくてはならないことがたくさんあると思いました。6年生の皆さんは今頃ちょうど実際の臨床のむずかしさに触れ、もっとうまくなりたいと思っている時期なのではないでしょうか? 私も手を動かして早く一人前になりたいと思う気持ちが強く、卒業後は大学を離れ1年間一般診療所で臨床研修を行いました。研修中にもっと考えなくてははいけないはずなのに、何が問題なのかもわからない。手が動くだけじゃダメなんだと実感しました。(まあ手も動い



ていなかったのですが。)そんな時、6年生の時の呪文のような治療方法を思い出し、もう一度大学に戻って勉強しようと決めました。

ここで大学院の生活を少しご紹介します。私が所属する生体歯科補綴学は文武両道ならぬ臨研(臨床と研究)両道の医局です。補綴の勉強と同時に、私は骨の研究をしています。両方を一緒に続けていくのは時には苦しいこともありますが、生活はとても充実していて楽しく過ごしています。大学院に進学して幸せだと思っていることの1つと一緒に頑張れる仲間とライバルができたことがあります。外来では他分野の同期の大学院生にそれぞれの専門について相談しています。一人の患者様を同期と一緒に治療する機会もあり、互いに切磋琢磨することができます。学会では国内外問わず他大学の大学院生とも知り合う機会があり、常に刺激を受け、よきライバルです。大学院の間にできた友達は世界に目を向けている人達も多く、大学院に入学しなければ知り合うことはできなかったと思います。将来臨床医になるのに大学院は必要なのかと感じる方も多いかと思いますが、大学院は専門医を取るためだけではなく、「物

事の考え方を学ぶ場」だと思っています。学位研究を通して理論的な考え方、プレゼンテーションの方法を学びます。これらのスキルは歯科医師として一人前になってから症例発表をするときに必ず必要になります。その症例の現状を把握し、原因を考え、治療をする。そして最も大切なのは治療後の考察です。これができていない症例発表はただの自慢話になってしまいます。

大学院進学は時間的な面、経済的な面でハードルが高いと感じるかもしれませんが、でも、その世界を見てみないとわからないことは必ずあります。まずは興味のある医局に遊びに行ってみてください。大学院生の楽しい姿も苦しい姿も見ると、自分の将来にも違った姿が見えてくるかもしれませんよ。



大学院へいこう

医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻 中 澤 亜香里

大学院2年目。私は口腔生命福祉学科を卒業し、新潟大学医歯学総合病院で歯科衛生士として働きながら大学院で学んでいます。勉強があまり好きでなく、生まれも育ちも新潟で比較的のほほんと、なるようになると思い生きてきた私が大学院に入学するなんて2年前はこれっぽっちも考えていませんでした。ましてや歯学部ニュースに大学院について書くななんて思ってもいなく、お話をいただいた歯診の某S先生を若干恨みながら(笑)パソコンに向かって必死に書いています。こんな私が大学院に入って感じたことを少しでも後輩に伝えることができると、大変恐縮ですが書かせていただきます。

私が入学する前に大学院について感じていたことは、①頭がいい人、研究熱心な人が行くところ。②働きながら研究なんて無理そう。③そもそも研究って何すればいいの。

大体こんなあほらしいことを感じていて、入学することに迷いがありました。しかし、大学病院に就職することが決まり「大学病院にいるのに大学院に行かないのはもったいないかも。2年で卒業だしなんとかなるか。」と考えるようになり入学に至りました。明確な理由はなく、とても単純です。(こんなこと書いたら怒られそうですが……。)そんなこんなで私の社会人院生としての生活が始まります。

1年目は、右も左もわからない新人歯科衛生士として外来で働き、終業後に授業に出るという形が主でした。慣れない生活の中で、仕事、授業、課題をこなすことを大変だと感じることはありましたが、授業は院内の先生だけでなく、院外の先生や、学生の頃はあまり関わりのなかった歯学科の先生から授業を受けることもあり、新鮮に感じることも多かったように思います。歯科の分野と社会福祉学の分野を深く学べることで、物事の見

方や考え方を改めること、知識を深めることができ、視野の拡大に繋がりました。また、学んだことを外来で接する患者様に実際に還元できることは嬉しく感じました。「2年で終わる」と考えていた私は、「2年しかない」と感じるようになっていました。だんだん仕事と院の生活に慣れてきた頃に研究も始めていきます。私は外来で働いていて感じたことをヒントに研究のテーマを決め、今は9月の学会発表に向け準備の真っ最中です。何も分からない私を手とり足とりに指導して頂いている先生方には、本当に感謝でいっぱいです。

軽い気持ちで入った大学院ですが、楽しく学びながら無事2年生になり3ヶ月が経ちました。本当にあっという間です。私のような人間が続けられるので、①も②も大丈夫です。③は先生方の厚いご指導のもとで行えます。

2年間という短い期間ではありますが、実りあるものにするには自分自身で学ぶ姿勢をもつことの大切さを改めて感じました。それは臨床の面でも強く感じています。学生の頃だけの知識や技術だけでは全然足らず、教科書通りにならないこと、知識と実際の口腔内を関連付けることの難しさを感じています。学び続けることの大切さを痛感する毎日です。そんな当たり前のことを再認識でき、社会人、歯科衛生士、人としてまだまだ未熟な自



分の様々な変化に繋がったことはとても貴重なことだと思います。

充実した院生活を送ることができているのは、先生方をはじめ同期3人、歯科衛生士の先輩方や多くの方々に支えていただいているおかげです。職場の同期でもある一人には同じ環境であること

もあり、励まし合ってきました。もう一人の同期も今年から院に入り、忙しそうにしています。入るタイミングや理由はそれぞれですが、得るものはきっと多いと思います。拙い文章でしたが、少しでも興味をもっていただければ幸いです。

